

## Long-Term Follow-up of Patients With Uveitis Treated With Adalimumab: Response Rates and Reasons for Discontinuation of Therapy

Laura E M Eurelings, Tom O A R Missotten, Mirjam E J van Velthoven, Paul L A van Daele, Jan A M van Laar, P Martin van Hagen, Alberta A H J Thiadens, Saskia M Rombach

Am J Ophthalmol. 2022 Aug;240:194-204. doi: 10.1016/j.ajo.2022.03.017.

アダリムマブ治療を導入するにあたって、治療の短期的な有効性および安全性はもちろん気になるところですが、長期的な有効性が期待できるのか、また治療はいつまで続ける見込みなのかということについての知見も大切です。我が国でもアダリムマブが非感染性ぶどう膜炎に承認されて6年が経過し長期投与例や中止例も経験するようになりました。今回ご紹介する論文ではアダリムマブで治療されたぶどう膜炎患者341例の長期経過について述べられています。アダリムマブ開始後の経過観察期間の中央値は4.9年で、症状が再燃なく経過したのはおよそ3.4年であり、最終受診時に51例は全身治療なく消炎が得られており、247例で何らかの全身治療のもと消炎が得られていました。そのうち、アダリムマブが継続されていたのは178例と対象症例の約半数でした。また、一時的なものも含めアダリムマブを途中で中止した症例は193例であり、治療が奏効したために中止した症例が57例、逆に効果が不十分で中止した症例が37例、副作用が43例、そのほか患者希望、妊娠、周術期の投与であったためなどの理由が報告されていました。この報告はオランダからの報告であるため、背景疾患が日本とは異なりますが、サルコイドーシスやベーチェット病の症例も比較的多く含まれております。アダリムマブ投与によってしかコントロールできない病態の場合には中止すべきではない一方で、アダリムマブ投与中には感染症などの副作用が懸念されることから、アダリムマブを中止できるような症例が見極められれば離脱を図るのが望ましいと考えられ、今後、アダリムマブを非感染性ぶどう膜炎の治療の選択肢として上手にとり入れるにあたり大変参考になるご報告であると思います。

(担当者： 近畿大学 岩橋 千春)